# ローンボウルズと英文学とピリオドドラマ[1]

関　　良　子

## 1．はじめに

高知大学人文社会科学部には、ローンボウルズ人文社会科学プロジェクトというのがある。西洋史が専門の川本真浩教授を中心に平成28年度から活動している教育・研究プロジェクトで、学部専門科目「西洋文化史」や共通教育科目「スポーツ科学実技」でローンボウルズに関わる授業が展開されているほか、平成28年度・29年度には、香港・マカオで「国際社会実習」が実施され、現地のコモンウェルス文化遺産の見学ののち、ボウルズ協会の訪問、ローンボウルズを介した国際交流が行われた。また、学外に出て、高知県下にある小中学校や子ども食堂で体験行事を行うなどして、地域交流・国際交流を行っている。プロジェクトメンバーの専門分野は、歴史学・経営学・中国文化研究・異文化間コミュニケーション・社会福祉学・英語教育学・英文学と、多岐にわたる。最近では、D&I（Diversity & Inclusion / 多様性と包摂）を一つのキー概念に据え、ローンボウルズに留まらず、スポーツ・芸術・言語コミュニケーションなどの文化活動、企業経営や社会福祉といった社会制度を素材として、D&I の歴史・現状・展望について、考察し議論を重ねている。

筆者は、平成31年度／令和元年度より、この教育・研究プロジェクトに加わっている。きっかけは、ある小さな発見であった。科学研究費補助金の助成を受けた自身の研究[2]の一環で、19世紀の英国人画家エドワード・バーン=ジョーンズ（Edward Burne-Jones, 1833–98）についてのある伝記を読んでいたところ、次のような一文を発見したのである。“After work the men would play bowls on the long stretch of grass that formed a bowling green on the south side of the house” (MacCarthy 127). 後ほど詳述するように、その後、少し調べてみると、バーン=ジョーンズがローンボウルズをよく嗜んでいたことが判明した。また、それ以降も筆者は、自身の研究や授業準備等で、英文学作品を原作にしたドラマや映画を鑑賞しているときに、ボウルズに関するいくつかの小さな発見をすることになった。本稿では、これまでに筆者が得た、それらの小さな発見をまとめ、ローンボウルズと英文学、ピリオドドラマの接点を指摘し、それをふまえて、英文学研究の観点からみた D&I の歴史と現状について考察する。

## 2．ローンボウルズとは

ローンボウルズは、英国をはじめとするコモンウェルス諸国で人気のあるスポーツである。芝生またはグリーンマットの上でボウル (bowl) と呼ばれる偏心球（重心が中心になく、転がすと一定

ⓒ高知大学人文社会科学部　人文社会科学科　国際社会コース

[1] 本稿は、令和3年度・令和4年度学長裁量経費採択事業「ローンボウルズを活用した『国際化』教育拠点の形成」の成果の一部である。

[2] 科学研究費補助研究（基盤C）「唯美主義と政治性の接点――モリス、バーン=ジョーンズ、クレインを中心に」（課題番号19K00394）。

の曲線軌跡を描く球）を、ジャック (jack) と呼ばれる標的球にめがけて転がし、どれだけ標的球のそばに近づけられるかを競う球技である。4年に一度開催されるコモンウェルス・ゲームズの公式種目であるほか、適度の運動量で楽しめることから、近年、インクルーシヴな娯楽スポーツとして注目されている。

このスポーツの歴史は古く、*Oxford English Dictionary* (2nd ed.) には、「ボウル・ゲームをする」(1.a. To play at bowls) の語義の使用例の初出として、1440年の英語・ラテン語辞典 *Promptorium parvulorum* という文献が挙がっている。ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564–1616) の戯曲には、bowl という単語が、字義どおりの意味でも修辞的意味でも多く使われていて、例えば『リチャード2世』(*The Tragedy of King Richard the Second*, 1595) の第3幕第4場の冒頭には、王妃と侍女との間で次のような会話が交わされる。

| | |
|---|---|
| QUEEN | What sport shall we devise here in this garden, |
| | To drive away the heavy thought of care? |
| LADY | Madam, we'll play at bowls. (Shakespeare, *King Richard II* 3.4.1–3) |

心配事から気を紛らわせるために庭でする娯楽として、すぐにボウルズが想起されるほど、当時の観客たちの間にもローンボウルズが浸透していたことが推測される。また、ヘンリー8世は、ボウルズ愛好家であったと同時に、下位の者、とりわけ「弓術の鍛錬を怠る兵たちを律する目的」で1511年にボウルズ禁止令を発し、のちにボウルズ場設置の際の免許制を定めていたという史実は、川本が指摘するとおり、「相当程度の社会階層や地域の広がりをもってボウルズがさかんにおこなわれていたことを物語っている」（川本「『来歴』再考」43）。それほどにローンボウルズとは、英国やコモンウェルス諸国では歴史が古く、人々の間に浸透したスポーツなのである。

## 3. バーン=ジョーンズとボウルズ

では、筆者が本プロジェクトにかかわることになる契機となった、バーン=ジョーンズとボウルズの関係について考えてみたい。「はじめに」で示した引用箇所に立ち戻ろう。これは、1860年からウィリアム・モリスが住んでいた、ロンドン南東部ベクスリーヒースにあるレッド・ハウス（図1）で、モリスらのサークルがどのように過ごしていたかについて言及した箇所である。この後には "The young wives would sit together, spending mornings on their wood-engraving or embroidery, stitching at a daisy pattern worked in white and coloured worsted threads on rough indigo-blue serge." (MacCarthy 127) と続く。短い記述だが、夕方に仕事の後で屋敷の南側にあるグリーンでボウリングに興じる男たちと、朝は木版や刺繍に打ち込む妻たちという、当時の人々の日常の一コマが垣間見られる。このレッド・ハウスへの入居がきっかけとなり、モリスは翌年にロンドンのレッド・ライオン・スクエア8番地に商会と工房を開設したことから、この地はアーツ＆クラフツ運動の原点と目される。現在はナショナ

図 1：レッド・ハウス①（2012年9月著者撮影）

ル・トラストの管理下にあるこの地は、建物と内装の美しさ、庭の華やかさで観光名所の一つとなっているが、この庭の芝生で芸術家たちがボウリングに興じていたことは、あまり知られていないだろう。

バーン=ジョーンズについて知る主要な資料には、妻ジョージアナが出版した2巻本の回顧録(*Memorials of Edward Burne-Jones*, 1904) がある。この回顧録の電子テキストに “bowl” と検索をかけてみると、7件がヒットする。そのうち1件は器の意味の bowl、残り6件が娯楽としてのボウルズである。順に、該当箇所を確認したい。

最初の例は1858年、ロンドン西部ケンジントンにあるリトル・ホランド・ハウス（図2）に逗留していたときの回想である。当時、バーン=ジョーンズの他にも画家ジョージ・フレデリック・ワッツや、後に写真家になるジュリア・マーガレット・キャメロンらが集まるこの屋敷は、文化芸術サークルのサロン的な役割を果たしていた (MacCarthy 86–89)。この屋敷の庭についても “Part of the great lawn was given up to croquet—the chief outdoor game of the time—and another to bowls, whilst elsewhere encampments could be seen of those who did not play; and all seemed happy.” (Burne-Jones 1:183) と書かれていて、彼らがクロッケーと共にボウルズに興じていたことが分かる。妻ジョージアナはこの屋敷への訪問について、“I could not realize then as I do now what this visit to Little Holland House must have been to him. There for the first time, he found himself surrounded without any effort of his own by beauty in ordinary life, and no day passed without awakening some admiration or enthusiasm.” (1:183) と述べており、ここでの生活がバーン=ジョーンズに日常の中にある美を再発見させる機会になったと振り返っている。

図 2：1860年代のリトル・ホランド・ハウス
（出典：Wikimedia Commons）

続く2件の bowl についての言及は、レッド・ハウスに関する箇所である。1860年6月にジョージアナと結婚したバーン=ジョーンズは、夏から10月までの間、モリス夫妻の新居レッド・ハウスに滞在する（川端・加藤13）。この屋敷を初めて訪問したときのことを思い出しながら、ジョージアナは屋敷のレイアウトを説明する際に、次のように書いている。

> It was not a large house, as I have said, but purpose and proportion had been so skillfully observed in its design as to arrange for all reasonable demands and leave an impression of ample space everywhere. It stood facing a little west of north, but the longest line of the building had a sunny frontage of west by south, and beneath its windows stretched a green bowling alley where the men used to play when work was over. For it was by no means on a holiday that Edward had come down, nor only to enjoy the company of his friend again, but that they might consult together about the decoration of the house [. . .]. (Burne-Jones 1:208–09; underline added)

この記述によれば、「この屋敷の一番長い壁が日当たりのよい西微南に位置し、その窓の下にボウル・レーンが広がっていた」とのことで、おそらく図3の写真に写る庭あたりにローンボウルズに

興じることができる芝生が広がっていたと考えられる。

バーン=ジョーンズに続いて、モリス・マーシャル・フォークナー商会の共同創設者となったチャールズ・フォークナーがレッド・ハウスに到着する。その様子を書く際も、“Charles Faulkner came down a couple of days after we did, and helped to paint patterns on walls and ceilings, and played bowls in the alley, and in intervals between work joined in triangular bear-fights in the drawing-room.” (Burne-Jones 1:209–10; underline added) とある。 先に述べたとおり、レッド・ハウスはアーツ＆クラフツ運動の原点と目される。それは、1858年に結婚したモリスが、理想の家を実現するために、建築家フィリップ・ウェッブに設計・建設を依頼し、芸術家仲間全員で内装や家具すべてを手作りで行い、それがモリスの最初の商会･工房の創設に結実したからである（図4･ 図5）。ジョージアナの回顧録のこの箇所には、モリスの仲間たちが作業をしながら冗談を言い合ったり、落書きをしたりする様子が生き生きと描かれている。その中で、彼らが「壁や天井に模様を描く傍ら、ボウルズに興じた」という記述は、大変興味深い。

図 3: レッド・ハウス②（2012年9月著者撮影）

図4･ 図5: レッド・ハウスの内装（2012年9月著者撮影）

1865年、バーン=ジョーンズ一家は、それまでの住み家だったグレート・ラッセル・ストリートからケンジントン・スクエア41番地（図6）に移住する。このロンドンでの住居タウンハウスについての説明にも、“Our Kensington garden was just large enough for a game of bowls, and many a game was played there. [. . .] ‘American bowls’ too was a game that Edward, Morris, Webb and Faulkner often played in town; dining together at some ‘pot-house’ afterwards and never tired of each other’s company.” (Burne-Jones 1: 289) と、2つの bowls への言及がある。また、「私たちのケンジントンでの住居の庭は、ボウル・ゲームをするちょうどのスペースがあるくらいの大きさだった」という表現が面白い。田舎にいても都会にいても、バーン=ジョーンズにとってボウルズは、日常に欠かせない娯楽だったことが分かる。

図 6: ケンジントン・スクエア41番地
（出典：Wikimedia Commons）

そのことは、回顧録に登場する最後の bowl への言及箇所からも窺い知れる。1873年に書いた、友人であり出版業を営むＦ・Ｓ・エリスへの短い手紙の中に、バーン=ジョーンズは次のように書いている。

> "O thou," he writes reproachfully in one note, "that thinkest I can be at bowls at three in the afternoon; this fortnight I am working like a stream devil to get some work done, worked till seven last evening, and must pound away for a fortnight yet." (Burne-Jones 2:41)

忙しすぎて「午後3時にボウルズへ行けると思うか？」と、半ば責めるかのように綴っている様子が面白い。それにしても、故人を偲んで書かれた回顧録に6度も bowl が登場するとは、ボウルズがバーン=ジョーンズ一家の生活の一部であり、よほどのボウルズ好きだったことが分かる。おそらく英文学･英国美術の研究者の眼にこれまであまり止まらなかった記述だろうが、バーン=ジョーンズとその周辺の芸術家たちの意外な趣味が判明して興味深い。

モリスは後年の社会主義運動を進める際に、労働と喜び・労働の中の喜びの重要性を説いていた。例えば1883年に行われた講演「有益な労働と無益な労苦」("Useful Work versus Useless Toil") の中でモリスは、仕事にはその中に希望がある労働と、生活の重荷でしかない労苦の二種類があり、仕事をする価値をもたらす希望の本質とは、休息の希望、生産の希望、仕事それ自体にある喜びの希望であると説いている (Morris 98–99)。また、モリス商会をはじめとするアーツ＆クラフツ運動の工芸家・芸術家たちの作品には、屋外のありふれた草花がモチーフとなっていることが多い。こうしたことを思い起こせば、室内での内装・家具づくりの作業の合間に行われた屋外でのボウリングは、彼らにとって恰好の気晴らしとなっただけでなく、ジョージアナがリトル・ホランド・ハウス滞在について、「日常の中にある美」の再発見につながったと回顧していたように、新たな創造力の源にもなったのではないかと想像される。そのように考えると、バーン=ジョーンズにとってローンボウルズは、単なる趣味以上のものであったとも考えられる。次に英国へ調査に行く際には、レッド・ハウスほか、アーツ＆クラフツ運動を率いた芸術家たちゆかりの地で、バーン=ジョーンズらがボウルズに興じたグリーンを、ぜひ探してみたいものである。

## 4. 英国小説とボウルズ

ローンボウルズと英文学、ピリオドドラマの接点として、次に筆者が発見したのは、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812–70) の小説『リトル・ドリッド』（*Little Dorrit*, 1855–57）を原作としたピリオドドラマをめぐってのことである。BBC 制作のドラマ『リトル・ドリット』（2008）第1話には、登場人物たちが邸宅の庭でローンボウルズに興じている場面が登場する。[3] このことを偶然発見した筆者が、その後、気になってインターネットで調べてみたところ、英国バースにあるジェイン・オースティン・センターが運営するウェブサイト上にある、ローンボウルズに関する記事に遭遇した。そして、この記事を通して筆者は、1995年公開の映画『いつか晴れた日に』（原作『分別と多感』*Sense and Sensibility*, 1811）にもボウリングの場面が登場すること、ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775–1817) が「カントリーハウスでのボウルズ・ゲームに親しん

[3] *Little Dorrit by Charles Dickens*. Adapted by Andrew Davies, performance by Claire Foy, BBC, 2008. Episode 1. Timestamp: 0:34:36–0:35:40.

でいた (Jane Austen was no doubt familiar with the country house version of the game [of lawn bowls])」ことを知ったのである (Jane Austen Centre)。本セクションでは、ディケンズの『リトル・ドリット』とジェイン・オースティンの『分別と多感』、それぞれの原作での bowl という単語の登場の仕方と、それらの映像化作品であるテレビドラマ・映画でボウルズが登場する場面とを比較する。

## 4.1. ジェイン・オースティンとボウルズ

英国上層中流階級（アッパー・ミドル・クラス）の生活を、ユーモアを交えリアルに描いた書簡体小説で人気のあるオースティンは、自身も長い手紙を姉キャサンドラへ宛てて頻繁に書いていたことで知られているが、1813年5月20日付の手紙には、次のようにある。

> How lucky we were in our weather yesterday! [. . .] Three hours and a quarter took us to Guildford, where we stayed barely two hours [. . .]. From some views which that stroll gave us, I think most highly of the situation of Guildford. We wanted all our brothers and sisters to be standing with us in the bowling-green, and looking towards Horsham.
>
> (Austen, *Letters* [from Jane Austen to her sister Cassandra, 20 May 1813])

サリー州ギルフォードのカッスル・グラウンドには、遅くとも1660年代からボウリング・グリーンが存在している (Rose)。オースティンは2時間ほどのギルフォード滞在時に散策し、「兄弟姉妹がこのボウリング・グリーンに勢ぞろいし、ホーシャムの町を眺めることができたらよかったのに」と手紙に綴っているのである。この手紙の内容から、オースティンがローンボウルズに精通していたという、ジェイン・オースティン・センターのウェブサイトの記事の指摘が裏付けされる。

さて、映画『いつか晴れた日に』でボウリングの場面が登場するのは、物語の主人公エリノアとマリアンら家族が引っ越した先のデヴォン州バートンでのことである。親戚サー・ジョン・ミドルトンの邸宅バートン・パークの庭で、マリアンとブランドン大佐がボウリングをする様子を見て、詮索好きのジェニングズ夫人が、大佐のマリアンへの恋心を言い当てる。[4] ここでのジェニングズ夫人の台詞、“Besotted. An excellent match. For he’s rich, and she’s handsome.” は、原作第8章の “It would be an excellent match, *he* was rich, and *she* was handsome” からきていることから、この映画の場面のもととなったのは、第8章だと考えられる。前後の文脈がわかるように、少し長く引用してみよう。

> [W]hen the visit was returned by the Middletons’ dining at the cottage, the fact was ascertained by his [Colonel Brandon’s] listening to her [Marrianne Dashwood] again. It must be so. She [Mrs. Jennings] was perfectly convinced of it. It would be an excellent match, for *he* was rich, and *she* was handsome. Mrs. Jennings had been anxious to see Colonel Brandon well married, ever since her connection with Sir John first brought him to her knowledge; and she was always anxious to get a good husband for every pretty girl. (Ch.8, p.31; italics original)

[4] *Sense and Sensibility*. Directed by Ang Lee, performance by Emma Thompson, Columbia Pictures, 1995. Timestamp: 0:36:28–0:37:25.

このように原作では、ミドルトン氏の邸宅でマリアンがピアノを弾き語りするのを聞き入っているブランドン大佐の様子を観察して、かねてから大佐に良い結婚相手を見つけてあげたいと願っていたジェニングズ夫人が、これは良い縁談になると確信する様子が描かれている。それを映画では、屋敷の庭で二人がボウリングに興じる場面に置き換えているのだ。おそらく英国らしい屋敷と庭園の美しさを映画で映し出す目的もあってのことだろう。

ただ、原作の小説にも確かに bowl という単語は登場する。マリアンが、彼女に思いを寄せるもう一人の男性ジョン・ウィロビーが住む屋敷を描写する箇所である。ウィロビーが住むアレナム屋敷に一人で行ったことを姉のエリノアにたしなめられたマリアンは、「たしかに軽率だったかもしれない」と反省の弁を述べながらも、その屋敷の豪奢さを次のように語る。

> [“] it is a charming house, I assure you.—There is one remarkably pretty sitting room up stairs; of a nice comfortable size for constant use, and with modern furniture it would be delightful. It is a corner room, and has windows on two sides. On one side you look across *the bowling-green*, behind the house, to a beautiful hanging wood, and on the other you have a view of the church and village, and, beyond them, of those fine bold hills that we have so often admired. [”] (Ch.13, p.59; underline and italics added)

このようにマリアンは、アレナム屋敷の2階の居間が角部屋になっていて、両方の壁に窓があり、その片方の窓からボウリング・グリーンが見えたことを、興奮しながら語るのだ。

実は、オースティンには、もう一つ bowl という単語が登場する小説がある。『マンスフィールド・パーク』(*Mansfield Park*, 1814) である。第9章で、主人公ファニーを含む一行は、資産家ラッシワースの屋敷サザートン・コートを訪れる。広大な屋敷の中と領地を案内されたあと、最後に自然園への入り口の前にたどり着く。その配置を説明する際、ボウリング・グリーンへの言及があるのである。

> [. . .] All were attracted at first by the plants or the pheasants, and all dispersed about in happy independence. Mr. Crawford was the first to move forward, to examine the capabilities of that end of the house. The lawn, bounded on each side by a high wall, contained beyond the first planted area, *a bowling-green*, and beyond *the bowling-green* a long terrace walk, backed by iron palisades, and commanding a view over them into the tops of the trees of the wilderness immediately adjoining. [. . .]
>
> [. . . . . .]
>
> The door [to the wilderness], however, proved not to be locked, and they were all agreed in turning joyfully through it, and leaving the unmitigated glare of day behind. A considerable flight of steps landed them in the wilderness, which was a planted wood of about two acres, and though chiefly of larch and laurel, and beech cut down, and though laid out with too much regularity, was darkness and shade, and natural beauty, compared with *the bowling-green* and the terrace. They all felt the refreshment of it, and for some time could only walk and admire. [. . .] (Ch.9, pp.81–82; underline and italics added)

『分別と多感』と『マンスフィールド・パーク』の二つの小説の例から考えるに、オースティン小説では、ボウリング・グリーンはカントリーハウスの立派さを示す指標の一つとして言及されているようである。立派な屋敷の外に広がる庭園の片隅にあるボウリング・グリーンが、庭園の景観に趣を与え、かつ屋敷の持ち主の財力や、領地の広さを示すものとなっているのである。ただ、『分別と多感』の原作と映画とを比較して、もう一つ興味深いのは、原作でのボウリング・グリーンの所有者は、好青年ではあるが過去の醜聞が理由でマリアンとは結ばれないウィロビーであるのに対し、映画ではサー・ジョン・ミドルトンの邸宅の庭にグリーンがあり、最終的に結婚することになるマリアンとブランドン大佐がボウルズに興じているという点である。この改変は、何を意味するのであろうか。この点については、ディケンズとボウルズの関係について考察した後に立ち戻ることにしたい。

## 4.2. チャールズ・ディケンズとボウルズ

ディケンズの小説『リトル・ドリット』をもとにしたピリオドドラマは、第1話で、資産家ミーグルズ夫妻の屋敷の庭で、その娘ミニーと小間使いのタティコーラムがボウリングをする様子を映し出している。登場人物らの会話の中でのミーグルズ氏の発言 “O, o, o, o . . . Temper, temper. Count five-and-twenty, Tattycoram” が、原作の第1部第16章で何度も繰り返される “Count five-and-twenty, Tattycoram” という表現に対応することから、この場面は原作の第1部第16章を再現しているのだと思われる。

ドラマのこの場面は、鳥かごの中の鳥たちにフォーカスしたカメラワークから始まり、続いて、屋敷の庭でミニーがボウリングをする様子、ミーグルズ夫妻が、鳥かごに似たあずま屋の中にある二人乗りブランコに腰掛けて、ティーカップを片手にくつろぐ様子を映し出す。その後、ミーグルズ氏とタティコーラムとの間で、次のような会話が交わされる。

| | |
|---|---|
| MR. MEAGLES | Ah, home sweet home. Nothing to beat it. What do you say, Tattycoram? |
| TATTYCORAM | Nothing at all, Mr. Meagles. |
| MR. MEAGLES | Nothing at all? But you feel as I do. I know you do, I know it! |
| TATTYCORAM | You think you do but, in truth, you know nothing at all. |

ここで雷が鳴り、ミニーが傘を置き忘れてきたことを思い出し、ミーグルズ夫人が「タティコーラムが喜んで取ってきてくれるわ」と言ったことに対して、タティコーラムは苛立ちを覚え、「落ち着いて。25数えなさい」というミーグルズ氏の声も届かず、その場を立ち去っていく。

ドラマのこの場面は、原作を大きく改変したものであり、原作の第16章には同様の場面は全く見られない。ただ、ミーグルズ夫妻の屋敷の説明には “It was a charming place (none the worse for being a little eccentric), [. . .] and just what the residence of the Meagles family ought to be. It stood in a garden, no doubt as fresh and beautiful in the May of the year, as Pet [=Minnie] now was in the May of her life; and it was defended by a goodly show of handsome trees and spreading evergreens, as Pet was by Mr and Mrs Meagles.” (Bk.1 Ch.16, p.192) とあり、ミーグルズ氏の性格を表す際には、“This was Mr Meagles’s invariable habit. Always to object to everything while he was travelling, and always want to get back to it when he was not travelling.” (p.193) と

の表現がある。原作とは少し異なるものの、ミーグルズ氏の屋敷の庭が、風変りではあるが美しく豪奢な様子、夫妻が娘のミニーを溺愛している様子、旅先では不満ばかりを述べ、我が家が一番だと考えているミーグルズ氏の様子を象徴的に映像化したのが、上記のような場面になったのだろう。そして、ここでもまた、映画『いつか晴れた日に』の場合と同様、英国の庭園の美しさを映し出す際の小道具としてローンボウルズが使われているのである。

一方、原作で bowl という単語が登場するのは、立派な邸宅の庭が描かれている箇所ではなく、第1部第6章と第2部第28章、ともにマーシャルシー監獄について述べている箇所である。マーシャルシー監獄は、リトル・ドリットことエイミー・ドリットが生まれ育った債務者監獄である。“The Father of the Marshalsea” という章題のついた第1部第6章では、この監獄の内部が次のように描写されている。

> Thirty years ago there stood, a few doors short of the church of Saint George, in the Borough of Southwark, on the left hand side of the way going southward, the Marshalsea Prison. It had stood there many years before, and it remained there some years afterwards; but it is gone now, and the world is none the worse without it.
>
> It was an oblong pile of barrack building, partitioned into squalid houses standing back to back, so that there were no back rooms; environed by a narrow paved yard, hemmed in by high walls duly spiked at top. Itself a close and confined prison for debtors, it contained within it a much closer and more confined jail for smugglers. Offenders against the revenue laws, and defaulters to excise or customs, who had incurred fines which they were unable to pay, were supposed to be incarcerated behind an iron-plated door, closing up a second prison, consisting of a strong cell or two, and a blind alley some yard and a half wide, which formed the mysterious termination of the very limited skittle-ground in which *the Marshalsea debtors bowled down their troubles*. (Bk.1 Ch.6, p.68; underline and italics added)

章の冒頭、「30年前にサザークの聖ジョージ教会の近くにあった」と紹介されるマーシャルシー監獄は、過去に実在していた監獄で（図7）、ディケンズ自身、12歳のときに、父親の借金ゆえに家族が数か月この監獄に収監され、長男チャールズは、靴墨工場に働きに出されたという経緯がある。この経験は「死ぬまで彼の心の奥底に、いまわしい古傷となってわだかまって」いたもので、小池滋は「小説『リトル・ドリッド』は、まさにその古傷から生まれ出た作品、その監獄を舞台の上でもテーマの上でも中心にして組立てた作品」だと解説する（小池436）。

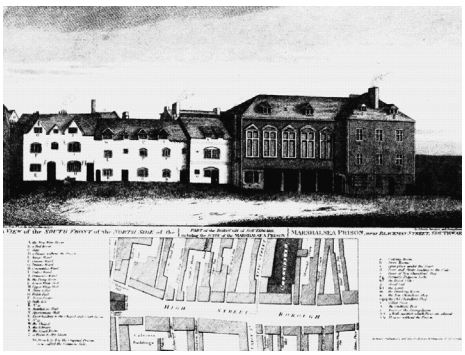

図 7：1773年頃のマーシャルシー監獄
（出典：Wikimedia Commons）

引用第2段落では、監獄のレイアウトが詳細に説明されており、むさ苦しく (squalid)、狭く (narrow)、閉鎖的である (close and confined) 点が強調されている。その中に、引用下線部にあるように、「マーシャルシー監獄の債務者らが憂さ晴らしをするためのごく小さなスキットル場があった」と書かれているのである。スキットルは、木製の9本のピンを目がけて木球または円盤を転がす室内ゲームで、

ローンボウルズよりも現代のボウリングに似たゲームではあるが、ここで債務者らが「憂さ晴らしをする」意味で動詞 bowl が使われているのは興味深い。

“An Appearance in the Marshalsea” という章題の第2部第28章にも、bowl という単語が登場する。舞台はやはりマーシャルシー監獄。物語の終盤、事業に失敗して監獄暮らしをするアーサー・クレナムのもとを、官庁勤めの青年ファーディナンド・バーナクルが訪問した際の会話の中である。この小説の中でディケンズは、「手続きが面倒で事務が少しもはかどらない官庁」（『研究社新英和大辞典』第6版）を皮肉って “Circumlocution Office”［小池訳：迂遠省］と呼んでいるが、その正体をバークナル家の人間自身に説明させる重要な場面で、bowl という単語が登場する。ディケンズらしい諷刺が効いた箇所なので、少し長めに引用したい。

> ‘[. . .] Don’t you see?’
>
> ‘I do not,’ said Clennam.
>
> ‘You don’t regard it from the right point of view. It is the point of view that is the essential thing. Regard our place from the point of view that we only ask you to leave us alone, and we are as capital a Department as you’ll find anywhere.’
>
> ‘Is your place there to be left alone?’ asked Clennam.
>
> ‘You exactly hit it,’ returned Ferdinand. ‘It is there with the express intention that everything shall be left alone. That is what it means. That is what it’s for. No doubt there’s a certain form to be kept up that it’s for something else, but it’s only a form. Why, good Heaven, we are nothing but forms! Think what a lot of our forms you have gone through. And you have never got any nearer to an end?’
>
> ‘Never!’ said Clennam.
>
> ‘Look at it from the right point of view, and there you have us—official and effectual. It’s like a limited game of cricket. A field of outsiders are always going in *to bowl at the Public Service*, and we block the balls.’
>
> Clennam asked what became of *the bowlers*? The airy Young Barnacle replied that they grew tired, got dead beat, got lamed, got their backs broken, died off, gave it up, went in for other games. (Bk.2 Ch.28, pp.704–05; underline and italics added)

バークナルは、自分たち官僚は「みんなにただ放っておいてほしいとお願いしているのだ (we only ask you to leave us alone)」と言い、形式にばかりこだわる官庁を、「私たちは形式に過ぎない (Why, good Heaven, we are nothing but forms!)」とさえ言い切る。その後、このように形式ばかりで、「決して目的に近づくことができない (you never got any nearer to an end)」迂遠省のことを、下線部にあるように「人数の限られた人でプレイするクリケット (a limited game of cricket)」に例えている。外野にいる人たちが「官庁をめがけてボールを投げ (bowl at the Public Service)」、役人がボールをブロックする。そして、「ボールを投げた人がどうなるか (what became of the bowlers)」とクレナムが尋ねると、「疲れ果て、打ちのめされ、足が動かなくなり、背骨が折れ、死んで、諦めて他のゲームに加わるようになるのだ (they grew tired, got dead beat, got lamed, got their backs broken, died off, gave it up, went in for other games)」とバーナクルは回答する。

ここではローンボウルズでもスキットルでもなく、クリケットの比喩が使われているが、ボールを投げるという動詞に bowl が使われている。*Oxford English Dictionary* (2nd ed.) には bowl, *v.*[1]の語義として、ボウルズのゲームをするという意味の他に、クリケットに関連する用語として「ボールを投げる (To launch or 'deliver' the ball at cricket. / II.4.a)」という意味が挙がっている。そして、その下に「もともとボールは地面に転がされていた (Originally, the ball was actually bowled 'or trundled' along the ground)」との説明がある。ゲーム種目の違いこそあれ、この小説でディケンズは、憂さ晴らしをする、あるいはぶつけて標的を飛ばすイメージで bowl という動詞を使っているのである。陰鬱な生活の中で、bowl することが恰好なストレス発散になっていたであろうことが想像される。そして、これらの bowl という単語が原作に使われていることを、演出家が意識したのかどうかは分からないが、この作品を翻案したピリオドドラマでは、原作とは異なる設定で、登場人物らがボウリングに興じる場面が映し出されるのである。

では、『分別と多感』と『リトル・ドリット』の映像化作品で、原作とは異なる設定でローンボウルズが映し出されることの演出的効果はどこにあるのか、次節では、この点について考察する。

## 5. ピリオドドラマとボウルズ

もう一度、二つの作品の原作と映像化作品の違いを簡単に整理しておきたい。『分別と多感』の場合、原作でのボウリング・グリーンの所有者は、好青年ではあるが最終的にマリアンとは結ばれないウィロビーであるのに対し、映画ではサー・ジョン・ミドルトンの邸宅の庭にグリーンがあり、最終的に結婚することになるマリアンとブランドン大佐がボウルズに興じている。『リトル・ドリット』の場合、原作では人々が bowl するのは監獄の中であるのに対し、ドラマでは資産家ミーグルズ家の屋敷の庭でローンボウルズが行われている。これらの改変はなぜ行われたのだろうか。

一つの目的は、既に述べたように、カントリーハウスと庭園の美しさを映像で映し出すことで、英国らしさを演出するためだと考えられる。

英国の歴史・文学・文化を感じさせるような映画は「ヘリティッジ映画 (heritage film)」と呼ばれ、1980年代に作られ始めた。深谷・西は、ヘリティッジ映画の特徴として、次の3点を挙げている。

> （1）シェイクスピアからオースティン、ディケンズからフォースターまで、古典文学作品を利用する。（2）コスチューム劇の要素をもち、貴族やアッパー・ミドル・クラスを扱う。（3）歴史劇の要素をもち、人物伝などをドキュメンタリー風に扱う。（深谷・西190）

確かに映画『いつか晴れた日に』もドラマ『リトル・ドリット』も、英文学の古典を映像化したものであり、ローンボウルズが登場する二つの場面では、上層中流階級の女性登場人物が、当時を思わせる華やかではあるが全身が覆われたドレスを着てゲームに興じている。この点に注目すると、ローンボウルズはヘリティッジ映画の系譜を受け継ぐピリオドドラマにおいて、その時代らしさと英国らしさを演出する小道具として機能していると言えるだろう。ただ、ローンボウルズ人文社会科学プロジェクトのキーワードの一つである「D&I 多様性と包摂」という視点から考えると、これらのピリオドドラマにおける原作からの改変には、「ちょっと待った」と声をかけたくなる。なぜボウリングに興じるのは長いドレスを着た若い女性でなければならないのか、なぜ舞台設定は、監獄内ではなくカントリーハウスの庭でなければならないのか——と。

川本は、数々の先行研究を整理して、18世紀末から19世紀前半頃のローンボウルズのプレイヤーが、ダラムやノーサンバーランドの炭鉱労働者や、繊維工業で栄えた都市ボルトンの紳士たちであったと記している（川本「衰退しない『旧き娯楽』」100）。また、スコットランド南西部では、「幅広い中産階級に労働者階級の一部が加わった男性中心」の娯楽だったと指摘している（川本「衰退しない『旧き娯楽』」108）。先に見たジョージアナ・バーン=ジョーンズによる回顧録でも、ローンボウルズに興じていたのは男性が中心的だったことが伺える。つまり、史料から浮かび上がるローンボウルズ愛好者は労働者階級を含む幅広い階級層であり、どちらかという男性中心に行われていた。歴史の中のローンボウルズは、女性の娯楽でもなければ、上層中流階級に限られたスポーツでもなかったのである。それがなぜピリオドドラマでは、美しいドレスを着た女性によってプレイされるのか――

ローンボウルズ人文社会科学プロジェクトでは、昨年度1月に、スポーツとジェンダーの研究に長年携わり、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会理事を務められた、中京大学の來田享子教授を講師に迎え、「多様性をめざす近代オリンピックの歩みと展望」という論題でオンライン講演会を開催した。講演の中で來田は、女性が初めて近代オリンピックに参加したのは1900年の第2回オリンピック大会であり、当初のオリンピックが男性に対しては「リーダーとしての資質を形成するエリート教育」の一環として行われ、「体力とともに勇気・判断・協調性など」が試されたのに対し、女性には「優雅な振る舞いや美しい姿勢をつくる礼儀作法」が求められ、「身体をさらすこと」は禁じられていたことを指摘し、そのことが典型的に見られる例として、第2回オリンピック大会でドレスを着てゴルフをする女性選手の写真を提示した（図8）。つまり、「同じスポーツをしていても、違う意味をもたせる」二重規範が敷かれていたのである（講演スライドより）。ヘリティッジ映画やピリオドドラマで長いドレスを着てローンボウルズをする女性登場人物たちの姿は、この第2回オリンピック大会でゴルフをする女性選手らの姿と重なる。

図 8：1900年第２回オリンピック大会（パリ）での女性のゴルフ（Wikimedia Commons）

英文学史の中で、多様性と包摂を最初に唱えた人物の一人と目されるのは、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882–1941) である。「女性が小説を書こうとするなら、お金と自分だけの部屋を持たねばならない (a woman must have money and a room of her own if she is to write fiction)」(Woolf 3) と主張したフェミニズム批評の古典的論考『自分だけの部屋』(*A Room of One's Own*, 1929) の中でウルフは、文学作品には女性が多く登場し、重要な役割を果たすにもかかわらず、歴史書に女性が登場することが極めて少ないという事実に気づき、次のように述べる。

> A very queer, composite being thus emerges. Imaginatively she is of the highest importance; practically she is completely insignificant. She pervades poetry from cover to cover; she is all but absent from history. She dominates the lives of kings and conquerors in fiction; in fact she was the slave of any boy whose parents forced a ring upon her finger. Some of the most inspired words, some of the most profound thoughts in literature fall from her lips;

in real life she could hardly read, could scarcely spell, and was the property of her husband. (Woolf 40)

「想像上は、とても重要なものなのに、実際は全く取るに足りない (Imaginatively she is of the highest importance; practically she is completely insignificant)」ものとして扱われる女性が、詩や小説、文学においてはページの最初から最後まで支配し、王や征服者の生涯を支配し、神の啓示を受けた深遠な考えを述べるのに対して、歴史書には殆ど姿を見せず、現実には指輪をはめられればどんな男の下僕にもなってしまい、現実の生活では文字を書くことすらできず、夫の所有物として扱われていることを痛烈に批判する。ここでのウルフの主張の力点が、フィクションで女性が重要な役割を果たしていることよりも、現実世界で女性の立場が軽んじられていることへの批判にある点は留意しなければならないが、前半の主張、つまり、フィクションの中で女性が、ある種、理想化されたアイコンとして描かれているという指摘は、初期の近代オリンピック大会での女性選手の服装や、ピリオドドラマでローンボウルズをする女性登場人物にも当てはまる。

大谷伴子によれば、ヘリティッジ映画が制作され始めた1980年代は、サッチャー政権の時期と重なり、「ノスタルジックに薔薇色に彩られ美化された過去の英国のイメージ」を描くヘリティッジ映画は、近年では「排他的なエリート主義的であるとして批判の対象とされる」傾向が強い（大谷 3, 5）。デヴィッド・P・クリストファーもまた、「豪奢な衣装、擬古的な演技で美しく撮影されたヘリティッジ映画は、理想化・ロマン化された英国生活のイメージを映し出し、多くの国際的映画賞を受賞した」一方で、批評家らにはそれらの映画が投影する「エリート主義・排他主義的な均質的過去 (homogeneous past) は、過剰にロマン化されたものであり、根本的に間違っている」と批判されたと指摘している (Christopher 150)。これらの指摘を踏まえれば、現実の歴史におけるローンボウルズ愛好者層とフィクションの歴史におけるドレスを着た上層中産階級の女性登場人物がローンボウルズに興ずる姿との間の齟齬というのは、批判されるべきヘリティッジ映画の誤謬の具体例とみなすことができるのではないだろうか。その意味で、ヘリティッジ映画の系譜を受け継ぐピリオドドラマには、他にもローンボウルズが登場する作品があるのかどうか、存在する場合『リトル・ドリット』や『いつか晴れた日に』と同様に、やはり上層中産階級の若い女性を理想化したアイコンとして描いているのかどうか——探求してみる価値はあるかもしれない。

## 6. おわりに

本稿では、ローンボウルズと英文学研究、ピリオドドラマの接点について、これまでに筆者が得た小さな発見をまとめる形で披露した。第一に、ローンボウルズの愛好者であったと思われるバーン=ジョーンズについての回顧録をもとに、アーツ＆クラフツ運動の原点となったレッド・ハウスで、芸術家らがローンボウルズに興じていた事実を指摘し、それが彼らにとって労働の合間の恰好の気晴らしになっただけでなく、新たな創造力の源でもあった可能性を指摘した。第二に、オースティンの『分別と多感』をもとにしたヘリティッジ映画、ディケンズの『リトル・ドリット』をもとにしたピリオドドラマ、それぞれの原作での bowl という単語の使われ方と、映像化作品で登場人物らがボウリングに興じる場面とを比較・考察した。その結果、映像化作品では原作とは全く異なる文脈でローンボウルズが登場しており、ドレスを着た若い女性登場人物がローンボウルズに興じる姿は、ヘリティッジ映画のステレオタイプ的英国のイメージを投影する演出として機能していると

いう、英文学研究の観点からみたD&Iの歴史と現状を指摘した。

アーツ＆クラフツ運動とローンボウルズの関係については、現時点ではバーン=ジョーンズの例しか見つかっておらず、ヘリティッジ映画とローンボウルズの関係についても、『分別と多感』と『リトル・ドリット』の二作品のみで、大きな結論を導くにはサンプルが少ないと言わざるをえないだろう。しかし、このような観点から、筆者が研究の中心に据えるウィリアム・モリスによる、労働と喜び、労働と休息の希望に関する議論や、英文学研究における多様性と包摂に関する議論を考えてみようという発想は、多分野にわたる研究者らが集う学際的な教育・研究プロジェクトに携わったからこそ得られた知見である。ローンボウルズと英文学とピリオドドラマの関係について、更なる接点を見つけられるかどうか——今後も注目していきたい。

## 7. 参考資料

（映像作品）

*Little Dorrit by Charles Dickens*. Adapted by Andrew Davies, performance by Claire Foy, BBC, 2008. Episode 1. Timestamp: 0:34:36–0:35:40.

*Sense and Sensibility*. Directed by Ang Lee, performance by Emma Thompson, Columbia Pictures, 1995. Timestamp: 0:36:28–0:37:25.（邦題『いつか晴れた日に』）

（電子テキスト）

Austen, Jane. *The Letters of Jane Austen*. Project Gutenberg. https://www.gutenberg.org/files/42078/42078-h/42078-h.htm Retrieved: 1 November 2022.

---. *Mansfield Park*. 1814. Project Gutenberg. https://www.gutenberg.org/files/141/141-h/141-h.htm Retrieved: 1 November 2022.

---. *Sense and Sensibility*. 1811. Project Gutenberg. https://www.gutenberg.org/files/161/161-h/161-h.htm Retrieved: 1 November 2022.

Burne-Jones, Georgiana. *Memorials of Edward Burne-Jones*. Vol.1. New York: Macmillan, 1906. Internet Archive https://archive.org/details/memorialsedward01burngoog/ Retrieved: 1 November 2022.

---. *Memorials of Edward Burne-Jones*. Vol.2. New York: Macmillan, 1904. Internet Archive https://archive.org/details/memorialsedward00burngoog/ Retrieved: 1 November 2022.

Dickens, Charles. *Little Dorrit*. 1855–57. Project Gutenberg. https://www.gutenberg.org/files/963/963-h/963-h.htm Retrieved: 1 November 2022.

（書籍）

Austen, Jane. *Mansfield Park*. Ed. John Lucas & James Kinsley. Oxford UP, 1970.

---. *Sense and Sensibility*. Ed. Claire Lamont & James Kinsley. Oxford UP, 1970.

Christopher, David P. *British Culture: An Introduction*. 3rd ed. Routledge, 2015.

Dickens, Charles. *Little Dorrit*. Ed. Stephen Wall & Helen Small. Penguin, 1998.

MacCarthy, Fiona. *The Last Pre-Raphaelite: Edward Burne-Jones and the Victorian Imagination*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2012.

Morris, William. "Useful Work *versus* Useless Toil." *The Collected Works of William Morris*, edited by May Morris. Vol.23. London: Longmans Green, 1915. pp.98–120.

Shakespeare, William. *The Complete Works of Shakespeare*. Ed. David Bevington. 7th ed. Pearson, 2014.

Woolf, Virginia. *A Room of One's Own / Three Guineas*. Ed. Michèle Barrett. Penguin, 2000.

大谷伴子「グローバル／ローカルな文化地政学へ」『ポスト・ヘリテージ映画：サッチャリズムの英国と帝国アメリカ』大谷伴子ほか編　上智大学出版，2010年　pp.1–19.

川端康雄・加藤明子『もっと知りたいバーン=ジョーンズ：生涯と作品』東京美術，2012年

川本真浩「衰退しない『旧き娯楽』: 19世紀イギリスのローンボウルズにみるスポーツと娯楽の歴史」『海南史学』59 (2021) : 96–113.
———「ローンボウルズの『来歴』再考」『海南史学』55 (2017) : 29–52.
小池滋「解説」チャールズ・ディケンズ『リトル・ドリット』第1巻（世界文学全集　第33巻）小池滋 訳　集英社，1980年　pp.433–45.
深谷公宣・西能史「イギリスの映像文化とメディア」『イギリス文化入門』下楠昌哉ほか編　三修社，2010年　pp.176–207

（オンライン講演）
來田享子「多様性をめざす近代オリンピックの歩みと展望」『社会の多様性を考える：スポーツをきっかけに、人文社会科学の視角から』主催：高知大学人文社会科学部「ローンボウルズ人文社会科学プロジェクト」グループ＆高知大学男女共同参画推進室　2022年1月18日　於：高知大学

（ウェブサイト）
Jane Austen Centre. “Lawn Bowls.” https://janeausten.co.uk/blogs/uncategorized/lawn-bowls Retrieved 1 November 2022.
Rose, David. “A History of Bowls on Castle Green.” *Castle Green Bowling Club*. https://sites.google.com/site/castlegreenbowlclub/a-history-of-bowls-on-castle-green Retrieved 1 November 2022.

（辞典）
*Oxford English Dictionary*. 2nd ed. CD-ROM. Oxford: Oxford UP, 2002.
『研究社新英和大辞典』第6版　電子辞書　研究社，2002年

## 8. 図版出典

図1: レッド・ハウス①（2012年9月著者撮影）
図2:1860年代のリトル・ホランド・ハウス (Wikimedia Commons)
Unknown author, “Little Holland House in the 1860s, west front, before demolition in 1871. Royal Borough of Kensington and Chelsea Libraries” (Public Domain) https://en.wikipedia.org/wiki/Little_Holland_House#/media/File:LittleHollandHouse_Kensington_1860's.jpg Retrieved: 1 November 2022.
図3: レッド・ハウス②（2012年9月著者撮影）
図4: レッド・ハウスの内装（2012年9月著者撮影）
図5: レッド・ハウスの内装（2012年9月著者撮影）
図6: ケンジントン・スクエア41番地 (Wikimedia Commons)
Spudgun67, “Sir Edward Burne-Jones 1833-1898 Artist lived here 1865–1867” (Creative Commons) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:BURNE-JONES_-_41_Kensington_Square_South_Kensington_London_W8_5HP.jpg Retrieved: 1 November 2022.
図7:1773年頃のマーシャルシー監獄 (Wikimedia Commons)
Unknown author, “The first Marshalsea prison on Borough High Street, Southwark, showing the south front of the north side, 1773” (Public Domain) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Marshalsea_prison_1773.JPG Retrieved: 1 November 2022.
図8:1900年第２回オリンピック大会（パリ）での女性のゴルフ (Wikimedia Commons)
Unknown author, “Paris 1900-Golf – Two competitors next to the same hole” (Public Domain) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Paris_1900_-_Golf_-_Two_competitors_next_to_the_same_hole.jpg Retrieved: 1 November 2022.

**[English Synopsis]**

## Lawn Bowls, English Studies, and Period Dramas

Yoshiko Seki

I have been a member of the "Lawn Bowls and Humanities" research and education project at Kochi University since 2019. The project was launched in 2016 by Professor Masahiro Kawamoto, a British and Commonwealth historian, and since then the project has provided regular lectures, school visits, community events and P.E. classes on lawn bowls at Kochi University. The project has also arranged study tours to visit Hong Kong and Macao to learn about Commonwealth sports history on site, and play international lawn bowl matches. A regular part of the project is to hold events for local children at primary schools to experience lawn bowls and raise interest in the sport. Recently we have been using lawn bowls as a catalyst to enliven our discussion on the history, the current condition, and the prospect of D&I (Diversity & Inclusion) from the viewpoint of humanities and social sciences. In this paper, I will share some of the discoveries I made while working with this project and demonstrate how we may be able to discuss the history and the conditions of D&I by focusing on the motif of bowls from the literary and cultural perspective.

The first discovery I made is that Edward Burne-Jones and some other Arts & Crafts artists in the nineteenth century loved to play lawn bowls. Fiona MacCarthy's biography of Edward Burne-Jones, *The Last Pre-Raphaelite*, mentions that when Burne-Jones and other artists like William Morris and Charles Faulkner were working on the interiors of the Red House in 1860, "after work the men would play on the long stretch of grass that formed a bowling green on the south side of the house" (127). Having found this quote, I searched the word "bowl" on the e-text of Georgiana Burne-Jones's *Memorials of Edward Burne-Jones* and there were six lawn bowls hits. He seemed to have played lawn bowls on any occasion possible; in 1858, for example, when he stayed at the Little Holland House, "part of the green lawn was given up to croquet [. . .] and another to bowls" (1:183). In 1865, when the family moved from Great Russel Street to Kensington Square, Georgiana recollects that their garden "was just large enough for a game of bowls" (1:289). Burne-Jones even complained that he was too busy to play bowls when he wrote a short letter to F. S. Ellis, his friend and publisher, in 1873, saying: "O thou [. . .] that thinkest I can be at bowls at three in the afternoon" (2:41). This seems something more than merely the discovery of an artist's trivial hobby. Considering that his collaborator, Morris, emphasised the importance of the "hope of rest, hope of product, hope of pleasure in the work itself" (a quotation from "Useful Work versus Useless Toil"), it is noteworthy that Burne-Jones and his colleagues found the "hope of rest" in lawn bowls. It is also significant to note that the interior designs by Morris & Co. were often inspired by wildflowers and ordinary garden grass and plants. The opportunities to play outdoor bowl games after work must have surely provided these artists with creative inspiration as well as the "hope of rest."

The second discovery is that lawn bowls is sometimes used as a stage prop setting in period dramas based on nineteenth-century novels. The two examples I discovered thus far are Jane Austen's *Sense and Sensibility* and Charles Dickens's *Little Dorrit*. In the film version of *Sense and Sensibility* (1995; directed by Ang Lee), Marianne Dashwood and Colonel Brandon play bowls at Barton Park, the property of Sir John Middleton, while the BBC drama adaptation of *Little Dorrit* (2008; written by Andrew Davies) shows Minnie and Tattycoram playing bowls in the garden of Mr and Mrs Meagles. An interesting point is that, although the word "bowl" does appear in both of the original novels, the context of how the word appears is completely different from the filmed versions. In the novel *Sense and Sensibility*, Austen mentions "the bowling-green" very briefly in order to show the charm of Allenham, Mr Willoughby's house, with its nice view of "the bowling-green" and "a beautiful hanging wood" from a window of the corner room upstairs (Ch.13); the bowling-green is mentioned to indicate the wealth of the home owner. In the case of *Little Dorrit*, Dickens uses the verb "bowl" to refer to distracting someone's troubles. Therefore, "the Marshalsea debtors bowled down their troubles" (Bk.1 Ch.6) and, in Ferdinand Barnacle's parable, people "bowl at the Public Service," which always retards the necessary process, and which Dickens aptly calls the "Circumlocution Office" (Bk.2 Ch.28). Notably, these two examples of lawn bowls scenes in period dramas both show well-dressed young ladies playing the game. Such modifications of the scene may have something to do with the tradition of British heritage films, which, as David P. Christopher explains, "projected a nostalgic, rose-tinted view of the past" but were often criticised as "they projected an elitist, exclusive version of a culturally homogeneous past, which was heavily romanticised and fundamentally false" (150). These representations of lawn bowls in period dramas present us with challenges about how modern notions of D&I fit into British cultural history.

These two discoveries—the relationship between lawn bowls and the Arts & Crafts movement and the relationship between lawn bowls and British period dramas—may seem relatively small and further research is needed to draw more substantial conclusions. Yet they do show the clear cultural and societal relevance of lawn bowls in nineteenth-century England. Had I not been involved in such a wide-ranging interdisciplinary project like our "Lawn Bowls and Humanities" research and education project, I would never have conceived such a focus on how lawn bowls is represented in English Studies.